

戯曲『パンチャラートラ』と『マハーバーラタ』

増 田 良 介

I 序

今世紀初頭にインド・ケーララ州で発見、出版された、13編のいわゆる「バーサ劇」¹⁾は、サンスクリット戯曲としての高い評価と盛んな議論にもかかわらず、作者や年代を始め、今なお不明なことの多い作品である²⁾。筆者は、出典となつたらしい作品と戯曲を比較することによって、作者の意図を探るという方法で各作品について考察を続けている[増田 1990a; 1990b; 1993.]が、本論はその一環として、大叙事詩『マハーバーラタ』(*Mahābhārata*, 以下 M)を元にした3幕の戯曲『パンチャラートラ(五夜)』(*Pañcarātram*, 以下 P)を取り上げる。Pの場合、元の物語が大きく改変されていることは明らかで、改変箇所の列挙も困難ではないが、それらを統一的に説明することは必ずしも容易ではない。本論では、Pだけに存在するある約束に着目し、物語の改変の意図と方法を考察する。

II 『マハーバーラタ』該当部分の梗概

まず、原典である M から、戯曲の扱う第4巻『ヴィラータの巻』(*Virāṭaparvan*)と、そこに至る経緯の部分の概略を掲げる。

1 第4巻以前

この叙事詩の主人公たちであるパーンダヴァ五兄弟は、いどこであるドゥリヨーダナを筆頭とするカウラヴァ百王子よりも全てに優れているため嫉妬され、迫害を受ける。あるとき五兄弟の長男で、普段は非常に道徳的なユディシュティラがドゥリヨーダナらに賭博に誘われる。これはドゥリヨーダナとその叔父シャクニらの策略であった。ユディシュティラは全てを失い、パーンダヴァは13年間国を追放されることになる。しかもその最後の一年間は誰にも正体を気付かれず暮らさなければならず、もし見付かれれば追放期間がさらに12年追加される、という厳しい条件つきである。

2 第4巻

12年が過ぎ、問題の第13年を暮らす場所に彼らを選んだのはマツヤ国王ヴィラータの宮廷であった。パーンダヴァと共同の妻ドラウパディーは、姿を変えてヴィラータの宮廷を訪ね、ユディシュティラは賭博師、次男ビーマは料理人、三男アルジュナは女装して踊りの教師とい

うようにそれぞれ就職する。

ところがヴィラータ王妃の弟である将軍キーチャカが、王妃の侍女となったドラウパディーにしつこく言い寄る。彼女は断り続けるが、逆恨みしたキーチャカに大勢の前で足蹴にされるという事件があり、夫の一人ビーマに屈辱を訴える。ビーマは怒り、復讐を決意する。ドラウパディーは、逢引と偽り、誰もいない夜の舞踏場にキーチャカを呼び出す。いそいそやって来たキーチャカを、ビーマは長い格闘の末殺す。朝になって集ったキーチャカの親族たちは、ドラウパディーを共に火葬して恨みを晴らそうとするが、ビーマは彼らも退治する。

一方ドゥリヨーダナは密偵を各地に送って必死にパーンダヴァを探すが、結果は思わしくない。ただ、調査中に得られた情報として、将軍キーチャカの暗殺が報告される。彼に何度も苦汁を嘗めさせられてきたトリガルタ王スシャルマンは、この好機にマツヤを攻めるよう提案する。カウラヴァはマツヤ進攻を決める。

まずトリガルタ軍がヴィラータの牛を略奪した。それを迎え撃つためにヴィラータ王と、アルジュナ以外のパーンダヴァは出かけてしまった。その際にカウラヴァの主力が、軍隊のいないマツヤを側面から襲った。牛飼いの長は、都に一人残っていた若い王子ウッタラに出陣を要請する。ウッタラは「御者さえいれば、アルジュナと見まごうばかりの働きができるのだが。」という。ドラウパディーはこの言葉に我慢できず、「後宮の踊りの教師ブリハンナラー(実はアルジュナ)はかつてアルジュナの御者をしていた。彼を御者にしてはどうか。」と進言する。そこでウッタラは妹ウッタラーを後宮に派遣し、ブリハンナラーを御者として出発する。

しかしウッタラは、いざ大軍勢を見ると怖じけづき、ついに車から逃げ出してしまう。アルジュナは彼を捕まえ、「では私が戦うからおまえは御者になれ。」と車に乗せる。そして、墓地に隠しておいた神弓ガンディーヴァを取り、ウッタラに自分の正体を明かす。彼を見たカウラヴァの戦士たちは、アルジュナと気づき、恐怖する。ドローナやビーシュマも「アルジュナに違いない。」と言う。しかし、ドゥリヨーダナは「もし彼がアルジュナなら追放が12年延長されるし、アルジュナでなければ倒すまでだ。」と相手にしない。アルジュナは全軍を相手に一人で戦い、ついに退却させる。

一方トリガルタ軍に勝利して都に帰った王は、息子ウッタラがブリハンナラーだけを伴ってカウラヴァと戦いに出掛けたと知って、あわてて助けに行くよう全軍に命令する。しかしユディシュティラは「ブリハンナラーが御者なら絶対に負けることはありません。」と笑う。そこへウッタラの使者が到着し、勝利を告げる。ウッタラに続いてブリハンナラーも帰って来る。王はウッタラの手柄を称えるが、彼は「勝ったのは自分ではなく、一人の神の息子です。彼は消えたが、明日か明後日また現れるでしょう。」という。しかしこの時ブリハンナラーはまだ正体を隠していたので、ヴィラータは彼がアルジュナであることには気付かなかった。

3日目に約束の13年は満了した。五兄弟は身を清め、ヴィラータに正体を明かした。王は非常に喜び、非礼を詫び、王国をパーンダヴァに、そして王女ウッタラーをアルジュナに捧げ

たいと申し出た。しかしアルジュナは「私は一年間後宮で、ウッターのそばで暮らしていた。従って、彼女の純潔を証明するために、息子アビマニユのために彼女を頂きたい。」と言う。王も同意し、結婚式が盛大に行われ、マツヤとバーラタの同盟が結ばれた。以上で第4巻が終わる。

Ⅲ 『パンチャラートラ』梗概

1 第1幕

今まさに祭儀を完了したドゥリヨーダナが登場し、ビーシュマ、ドローナ、カルナ、シャクニらに祝福を受ける。続いてやって来た諸国の王たちからも挨拶を受けるが、ヴィラータだけはまだ到着しない。ブラーフマナ(婆羅門)であるドローナにドゥリヨーダナは「何かダクシナー³⁾を差し上げたい。」と言う。ドローナは「12年間行方知れずのパーンダヴァたちに分け前(王国の半分)を与えよ。」と頼む。ドゥリヨーダナはシャクニと相談し、5日以内⁴⁾にパーンダヴァの消息をもたせよという条件付きで承諾する。ドローナは、「12年間行方不明の彼らの消息がわずか5日でわかるはずがない。」と落胆する。

そこへヴィラータ王の使者が到着し、キーチャカとその兄弟100人が、何者かに素手で襲われて殺されたため、祭儀に行けない旨を伝える。それを聞いたビーシュマは、このようなことが出来るのは大力のビーマ以外にないことに気付き、ドローナに5日で発見する条件を承諾させる。さらにビーシュマはドゥリヨーダナに、「祭儀に來なかつたヴィラータを攻めて牛を奪え。」と勧める。ドローナにはひそかに、「これで、ヴィラータに義理のあるパーンダヴァたちは必ず出て来るはずだ。」と説明する。ドゥリヨーダナは同意し、全員出陣する。

2 第2幕

王の誕生祝いに牛を連れて都へ向かう牛飼いたちを、ドゥリヨーダナの軍勢が襲い、牛を奪った。それを聞いた王は、カウラヴァ軍を迎え撃つために自分の車を出すよう命ずるが、御者が「王の車には王子のウッターが乗り、ブリハンナラー(実はアルジュナ)を御者として出陣した。」と伝える。それを聞いて尊者(実はユディシュティラ)は「ブリハンナラーが御者なら大丈夫だ。」と言う。しかし、伝令が「敵の軍勢は大損害を受け、ドローナやビーシュマさえ退却したが、アビマニユ(アルジュナの子)だけは向かって来る。」と伝えると、尊者はあわてて「アビマニユがいるならブリハンナラーではなく別の御者を送れ。」と言う。王は不審に思う。再び伝令が着き、敵の敗走を伝える。

帰って来たブリハンナラーと尊者、それに王が話しているところへ伝令が来て、アビマニユを捕虜にしたことを伝える。ブリハンナラーは「ここにアビマニユを捕らえるほど強い者がいるのか。」といぶかしむ。しかし、王の料理人が車に近付いて両腕で抱き降ろしたと聞き、それがビーマであったことを知る。連れて來られたアビマニユにアルジュナとビーマは親しく話し掛けるが、二人の正体に気付かないアビマニユは失礼な扱いと憤慨し、丁寧に話し掛ける

王にも反抗的に答える。

ウッタラが帰還し、「カウラヴァを破ったのは実は自分ではなくこのアルジュナだ。」とブリハンナラーを指さす。ブリハンナラーは否定するが、やがて認め、料理人がビーマで尊者がユディシュティラであることも明かす。アビマニユは失礼を詫げる。王はアルジュナに娘ウッタラーを贈ろうとするが、彼は彼女を息子アビマニユのために受ける。王はウッタラを婚礼の使者としてドゥリヨーダナの宮廷に送る。

3 第3幕

アビマニユが捕えられたことをドローナ、ビーシュマ、カルナ、ドゥリヨーダナ、シャクニらが嘆いている。アビマニユを捕虜にしたのが弓矢をもたない歩兵であったことを聞き、一同は驚く。しかし、その歩兵が風のようにすばやかだったと聞き、ビーシュマは「それはビーマに違いない。」という。ドローナもこれに賛成するが、シャクニは「それだけではわからない。」と笑う。

また、カウラヴァを一人で粉碎したウッタラが実はアルジュナだったというビーシュマたちと、それを否定するシャクニが言い合っているところへ、カウラヴァの旗印を撃った一本の矢が届けられる。ビーシュマは矢に刻まれた文字をシャクニに読ませる。そこにはアルジュナとある。シャクニはうろたえるが、「同名の戦士がいるのだろう。」とうそぶく。ドゥリヨーダナも「彼らを利するために嘘を言うなら、私はユディシュティラを見るまで王国は与えない。」と態度を硬化させる。

そこへヴィラータの町からウッタラが到着する。ユディシュティラの使者として、ウッタラーとアビマニユの婚礼が行われることを伝えに来たのである。婚礼はカウラヴァの宮廷で行われることになる。シャクニもさすがに否定できず、これで五日以内にパーンダヴァの消息を伝えるという約束は果たされ、ドゥリヨーダナは王国の半分をパーンダヴァに与えることを承諾する。一同喜びのうちに幕。

IV 「パーンダヴァの発見」の意味

以下では両作品の比較を行う。両作品の最も重要な相違は、行方を隠しているパーンダヴァがもし発見されればどうなるかが全く逆になっていることである。まずこの点に着目してみる。

1 『マハーバーラタ』

Mで、パーンダヴァの13年の追放のうち、第12年までが第3巻にあるのに対し、第13年目だけは別に一卷を立て、第4巻となっている。量的には無論第3巻がはるかに膨大なものではあるが、第4巻の重要性がわかる。この巻のパーンダヴァの行動に、第3巻とそれほどの違いがあるわけではなく、次々に襲う苦難にそれぞれの得意分野を生かして立ち向かい、乗り越えて行

くだけである。ところが第4巻でのパーンダヴァ五兄弟は、もし見付かれれば追放があと12年追加されるという境遇にある。したがって、何をするときも正体を知られてはならないという条件が、常に底流として作用する。ドゥリヨーダナらは総力を挙げてパーンダヴァを見つけ出そうとし、パーンダヴァは、見付からないように苦勞して暮らす。読者から言えば、冒険の内容は他の巻と変わらなくても、この制約のために新たな興味が加わるわけである。第4巻の特徴はまさにこの制約なのである。

2 『パンチャラートラ』

ところがこれに基にしたはずの戯曲Pでの状況は大きく異なる。最初に人物関係を整理しておく。対立しているのは、現在国を支配しているドゥリヨーダナからカウラヴァ百王子と、彼らのいところで現在行方の知れないパーンダヴァ五兄弟である。そして、戯曲第1幕の舞台はカウラヴァの宮廷である。しかし、そこにいる全員がカウラヴァ派というわけではなく、両派に尊敬される長老格のドローナとビーシュマは、実はパーンダヴァに同情的であり、宮廷内では親パーンダヴァ派を代表する形である。一方、ドゥリヨーダナの叔父シャクニらは、パーンダヴァを快く思っていない。叙事詩ではパーンダヴァに強い反感を持っているドゥリヨーダナとカルナは、劇ではそれほどでもない。ドゥリヨーダナはシャクニの強硬な姿勢にむしろ戸惑いを見せ、カルナは中立的である。

まず第1幕、「何かダクシナーを差し上げたい。」と提案するドゥリヨーダナに、ドローナは「ではパーンダヴァに領土を与えてくれ。」と乞う。これが、この戯曲においてパーンダヴァが言及される最初である。

ドローナ：・・・息子よ、聞け。

住み家のなく、行方が12年間どこにも見付からないパーンダヴァたちに、お前は分け前を与えてやれ。これが私の乞うものであり、ダクシナーだ。(I, 31)

このセリフから、パーンダヴァが12年間行方知れずであることがわかる。Mでは、一年間であるから、既にここで大きな違いがあることがわかる。さて、ドゥリヨーダナは叔父シャクニに相談する。そしてシャクニは次のような提案をする。

シャクニ：「もし五夜のうちにパーンダヴァたちの消息がもたらされるなら王国の半分を与えよう」とのことです。(I. 45⁶)

言うまでもなくこれは、12年間も行方不明のパーンダヴァの消息が、わずか五日でわかるはずはないという前提に立った提案である。ドゥリヨーダナもシャクニもパーンダヴァに王国を割譲するつもりはないのであるが、ドゥリヨーダナは一旦ドローナにダクシナーを与える

と約束した以上、形だけでもその言葉を実行したいとは思っている。そこで策士のシャクニが考えたのがこの提案だったというわけである。これならドゥリヨードナは自分の言葉を虚言にすることなく、しかもパーンダヴァに王国を分け与えずにすむことになる。

さて、この提案こそがPという戯曲の驚くべき点である。これによって、パーンダヴァ派と反パーンダヴァ派の立場がMとは全く逆転するのである。Mのパーンダヴァは期限までの間に見付かれれば追放期間が追加される。従って、カウラヴァは見付けようと、パーンタヴァは見付からないように努める。ところがPでは、もし彼らが見つかれば、ドゥリヨードナは王国の半分を分け与えなければならない。それゆえ、パーンダヴァ派(ドローナ、ビーシュマ)は何とか見付けようと努力し、反パーンダヴァのシャクニ⁵⁾は、そうさせまいとすることになる。この約束自体はドゥリヨードナの宮廷でなされたことであり、パーンダヴァたち自身のあづかり知らぬことではあるが、これによって、パーンダヴァの所在がカウラヴァ宮廷に知られれば、彼らは正当な領土を得ることができ、『マハーバーラタ』のように戦争を起こす必要もなくなる。つまり、パーンダヴァが正体を隠しており、その正体を知られることが彼らの運命に大きな影響を与えるということでは共通しているものの、正体を現すことは、パーンダヴァにとって逆に有利な状況になったのである。

V 変更の意図

詩人がどのような意図でこの変更を行ったかをより正確に知るには、この変更が、物語の進行上どのようなメリットをもたらすかを分析せねばならない。本章ではこれを検討する。

1 ビーマによるキーチャカ殺害の挿話

12年間も行方不明であったパーンダヴァの消息を五日以内にもたせなどという無理難題を言われて途方に暮れていたドローナだが、そこへヴィラータ王の使者が到着し、「ヴィラータの親族で將軍のキーチャカが、兄弟たちとともに何者かに素手で殺された。」と報告する。それを聞いたビーシュマは、これがパーンダヴァの一人、大力無双のビーマの仕業であることに気付き、ドローナにそっと教える。ドローナはシャクニの難題に答えられることを確信し、提案を受け入れる。

この事件は重要である。ドローナはこの事件によってパーンダヴァの居所に気付き、賭けを受け入れる。つまり、この事件は物語の進行上不可欠な役割を持っている。ところが、ビーマが106人を素手で殺したというこの派手な武勇伝はMにもちゃんとあり、カウラヴァの宮廷にも伝わっているのである。ということは、終始パーンダヴァは発見されてはならないはずのMでも、パーンダヴァの居所がビーマの軽率な行動によって悟られる危険性はあったということにならないか。

『マハーバーラタ』のパーンダヴァは、第4巻全体を通じて、変装し、王族にふさわしからぬ仕事をするにも耐え、細心の苦勞を払って身分を隠している。そのかいあって、ドゥリ

ヨーダナの密偵たちも彼らを見付けることができない。ドラウパディーがキーチャカに執拗に言い寄られたときも、ビーマは、その怪力を人前で発揮してしまうと正体がばれてしまうので、わざわざ夜中に呼び出してから殺している。ところが、キーチャカ暗殺の直後、彼の火葬に集まってきた親族たちをビーマが殺す場面⁶⁾では、詩人がこのことを忘れてしまったらしい。彼らはそこにいたドラウパディーを見て、キーチャカと共に火葬してしまえと、連れて行く。助けを求める彼女の声を聞いたビーマは、寝床から跳び起きて駆け付け、キーチャカの親族を105人殺す。さて、ビーマはキーチャカー人を殺すのに、わざわざ深夜に人気のない場所に呼び出し、夜が明ける前に厨房(彼は料理人として仕えている。)に戻っているにもかかわらず、親族105人を殺す際には、そのような配慮を全くしていない。この時は既に夜も明けているし、人もいる。そもそも、一人ならともかく105人もの人間を殺す大格闘をすれば、目立たないはずがない。つまり、正体を隠すということについて、キーチャカー人を殺すときと、親族105人を殺すときの詩人の意識がまったく異なっていたのである。

M自体のなかに、パーンダヴァが素性を隠して行動しているという前提に矛盾する部分があるということは重要である。明らかに詩人のミスである。ところで、この第4巻を題材にPという戯曲を書いた人物は、パーンダヴァの正体云々がこの巻の中心モチーフであることをはっきり認識していた。このことは、Pにおいて、他の状況を変えずにパーンダヴァが素性を現すことの意味だけが全く逆に変えられているということ自体に如実に現れている。そのような人物がこの巻を読めば上述の矛盾に気付かなかったとは考えにくい。

果たしてPではこの矛盾が見事に解消されている。100人殺害の知らせを聞いたビーシュマは、パーンダヴァがヴィラータ王宮にいることを知り、ドローナに提案に応じるよう勧める。目立ち過ぎるビーマの活躍は、Mでは不自然な要素であったのだが、Pではまさにその目立つという点において、物語を進展させるのに不可欠な要素となっているのである。

2 アルジュナの戦いにおける活躍

さて、第4巻にはまだこのような部分がある。攻めてきたカウラヴァ軍を相手にブリハンナラーことアルジュナが一人で戦う場面である。火葬場に隠しておいた愛用の弓ガンディーヴァを取りにいくブリハンナラーを見て、カウラヴァの戦士たちは「これはアルジュナに違いない」と恐怖におののく(37.2)。そしてドローナはアルジュナの強さを語り、警告する(37.10f.)。しかし、これに対し、カルナとドゥリヨーダナは不快感をあらわにする。とくにドゥリヨーダナは、「もしあれがアルジュナなら彼らはあと12年さまよわねばならないことになるし、他の者なら地に倒すまでだ。」とうそぶく。さらに戦いの始めに凶兆を見て取ったドローナが再び警告したときにも、ドローナ、ビーシュマ、クリパに対して同様の答えを返している(37.1ff.)⁷⁾。ここではブリハンナラーがアルジュナであることが確認されているわけではないからまだ理解できるにしても、不可解なのは、戦いのなかでカルナとアルジュナの一騎打ちになったときの二人の言葉(55.1ff.)である。まずアルジュナが、「カルナよ、お前が広間

の真ん中で多くの言葉で誇った、自分に戦いで匹敵する者はいないということを」で始まる呼び掛けによって挑戦する。ところが、この中に次のような言葉が含まれているのである。

広間で悪人どもに苦しめられているバーンチャーリー(ドラウバディー)をお前は見ていた。その報いを今そっくり得るがいい。(55.4)

ダルマの縄に縛られた私がかつて耐えた、私のその怒りの戦いにおける勝利を見よ、ラーデーヤ(カルナ)よ」(55.5)

ここで彼はもはやブリハンナラーではない。はっきりした名前こそ言っていないが、これでは自分がアルジュナであることを名乗っているのも同然である。実際にも、これに対するカルナの答えのなかで、カルナはアルジュナに「パールタよ」(55.7:8;11),「カウンテーヤよ」(55.12)(いずれもアルジュナの別名)と、相手がアルジュナであることを当然の事実として呼び掛けてしまっている。つまり、ここでカルナはアルジュナを見付けてしまったのだ。ということは、前のドゥリヨーダナの言葉にあった通り、パーンダヴァはさらに12年の追放生活をせねばなくなるはずである。ところが、ここでカルナはそのことに全く触れず、ライヴァルであるアルジュナと正々堂々戦って、敗走する。

不可解に見えるが、事情はおそらく単純なことであろう。アルジュナがまだカウラヴァに素性を知られてはならないことを、作者はまたも忘れていたのである。そもそも上述のドゥリヨーダナの言葉からこの時点まで、パーンダヴァの正体云々の件は全く言及されていない。その間を埋め尽くしているのは詳細な戦いの描写である。アルジュナとカウラヴァたちの息詰まる勝負を描き出すのに熱中するうちに、手慣れたルーティンに入り込んでしまい、この場面が第4巻全体のなかでどのような位置にあり、登場人物たちがどんな立場にあるかなどということをつつかり忘れてしまうということはあるように思える⁸⁾。

戦いにおけるアルジュナのこの活躍⁹⁾も、劇では有効に生かされている。第3幕でドローナとビーシュマは、パーンダヴァの居所を示す証拠をシャクニに突き付ける。ここでドローナらが提示する二つの根拠というのが、戦いにおけるパーンダヴァの活躍、つまり最初はビーマによってアビマニユが捕虜にされたこと、次はカウラヴァに降り注ぎ、大きな打撃をもたらした矢にアルジュナの名があったことなのである。しかしシャクニは、アビマニユを捕らえるだけの力のある戦士が他にいないとは言えないし、アルジュナの矢も、同じ名前の別の戦士だろう、と否定し続ける。しかし、ユディシュティラの使者としてウッターラが、アビマニユとウッターラの婚礼を知らせるためにやってくるに至って、ついにどうにも否定のしようがなくなってしまう。そして、約束どおりパーンダヴァに王国が与えられ、大団円となる。

この場面は、ビーマ、アルジュナ、ユディシュティラという、パーンダヴァの主要な3兄弟(この戯曲に登場するのはこの3人のみ)に関係する根拠が順に提示されてシャクニを追い詰めていくという構成になっている。ここで、ビーマとアルジュナの活躍は、シャクニを沈黙さ

せるだけの決定的な証拠とされてはいないものの、やはりなくてはならないものである。少なくとも M のように、巻全体のコンセプトと矛盾するということはない。アビマニユの捕囚も矢の名前の挿話も M にはないが、これは戦いでパーンダヴァが活躍せねば得られなかった消息である。そしてこの戦いはまさにこれらの消息を得るために第 1 幕でビーシュマが提案したものなのである¹⁰⁾。P の作者は、パーンダヴァの発見の意味を逆転することによって M の弱点であった二つの矛盾を、物語上で意味のある要素に変えて生かすことに成功したわけである。

VI 設定の変更による整合性の破綻

さて、一方でこのように根本的な物語の逆転を行えば、他の部分との整合性を保つことが難しくなるのも確かである。以下では新たに生じた矛盾点の一つについて、作者がそれをどのように処理しているかを検討する。

M で、第13年目にパーンダヴァが身分を隠していたのは、賭博に負けたからであり、正体を明かしたのは、期限が満了したからである。この経緯に疑問の余地はない。一方戯曲のパーンダヴァは、劇が始まった時点では行方不明で、やがて第 2 幕で正体を明かす。ところが、そもそもなぜ行方を隠していたのか、そして、途中で自分たちの正体を明かしたのはなぜか、ということは本文では不自然に曖昧である。正体を明かすという行為はすなわち彼らを拘束していた理由がなくなったということを意味するから、この二つは一つの問題の表裏であるとも言えるのだが、以下ではこの問題を取り上げてみる。

1 パーンダヴァ潜伏の理由

まず戯曲のパーンダヴァがなぜ行方を隠していたかを本文から検討する。M と同様 P でも、確かにパーンダヴァは行方知れずであった。ただ、上述のように、M において彼らが姿を隠していたのは13年間の最後の一年間であったのに対し、劇では12年間行方が知れないとされている¹¹⁾。しかし、パーンダヴァが正体を隠している理由や、発見されてしまった場合のペナルティ、正体を明かしてもよい条件などは、劇中で一度も明確に述べられないことがない。P で彼らが王国を失った事件である賭博が言及されるのは、次の場面が唯一である。

ドゥリヨーダナ：

かつて彼らが広間の真ん中で王国と誇りとを損なわれたとき、力を使うこともできた彼らはなぜ怒りを抑えたのですか。(I.35)

ドローナ：このことなら、正しくやっているふりにだまされた、賭博好きなユディシュティラに尋ねるべきだ。

彼はビーマが広間の柱を持ち上げるのを止めた。もしある者に投げ付けていたらシャクニは我々を[今頃]侮辱出来なかっただろう。(36)

これらの箇所から、ユディシュティラが賭博でシャクニに負けたらしいことがわかる。しかし、彼らの行方がわからないことがこれに関係あるとはっきり言われているわけではない。

2 パンダヴァが正体を明かした理由

第2幕に目を転じればさらに不可解な場面がある。ウッタラの御者として出陣したブリハンナラーことアルジュナは、一人でカウラヴァ軍を撃破してしまう。ところが、ブリハンナラーが実はアルジュナであることを、ウッタラが明かしてしまう。

ウッタラ：・・・最も称えられるべき人に顕彰をなしたまえ。

王：息子よ、誰にだ。

ウッタラ：ここにおられるダナンジャヤ(アルジュナ)様に。

王：なんと、ダナンジャヤにだと。

ウッタラ：はい、この方は、

墓場から、弓と、矢の尽きない二つのえびらを持ってきて、ビーシュマらの王を倒し、われわれを守りました。(Ⅱ.61)

するとアルジュナは、ウッタラの言葉を打ち消そうとする。

ブリハンナラー：お許しを、お許しを、大王さま。

この方は、幼さゆえ混乱して攻撃していてもわからないのです。すべての行いを自らなしていながら、他人のと思っています。(62)

ウッタラ：疑うことはありません。これが語るでしょう。

前腕の中に隠された、ガーンディーヴァの弦に打たれた傷は、12年の後でも色が消えていません。(63)

ブリハンナラー：

これは私の腕輪の回転でできた傷です。締め付けて色が変わってこの腕あての場所にあるのです。(64)

王：ともかくみてみよう。

ブリハンナラー：

わたしがもしルドラの矢に手足をなめられたバーラタ＝アルジュナなら、これはビーマでこれはユディシュティラかも知れませんね。(65)

王：ああ、ダルマラージャ(ユディシュティラ)、ヴリコーダラ(ビーマ)、ダナンジャヤ(アルジュナ)、どうして私を信用してくれないのだ。よしよし、時は来た。ブリハンナラーよ、あなたは中へ入って下さい。

ブリハンナラー：大王の仰せの通り。

尊者：アルジュナよ、いやいや入るべきではない。我々は誓いを果たしたのだ。

アルジュナ：あなたの仰せの通り。

『マハーバーラタ』と同様、ヴィラータの宮廷でパーンダヴァたちは偽名を使って滞在しているから、偶然行方不明だったのではなく彼ら自身が正体を知られないように努めていたことは確かである。ウッタラに名前を明かされてしまったときも一旦は否定しようと試みている。ところが不思議なことに、隠し通せないかと悟ると、彼らは実にあっさりと自分達の正体を明かしてしまう。この時例えば、約束の期間がちょうど満了したとか、カウラヴァの宮廷で結ばれた新しい約束について知らされたというなら理解できるが、隠そうと努めている時と正体を明かしてしまう時の間には、何の状況の変化もない。従って、彼らの態度の変化には何の必然的な理由もないのである。さらに、ある期間正体を隠していなければならず、見付かれればペナルティがあるというような趣旨のことも全く言われていない。彼らが仮にそのような状況にあったならば、これほどあっさりと白状してしまうことはありえない。彼らがなぜ正体を隠しているかも、そのことをウッタラに指摘されてなぜ身分を明かす気になったかということも、劇本文からは全くわからないのである。

3 曖昧にされた意図

物語の何らかの要素が劇中で説明されないということ自体は珍しいことではない。Pは巨大なMのごく一部を戯曲化したものであるから、完結した作品であるとはいえ、背景や人物関係の全ての細部が戯曲のなかで説明されうるわけもなく、ある程度予備知識のある観客を前提としている。とは言え、両者の筋が異なる以上、Pの本文に書かれていないこと全てをMから無批判に補って来るべきではない。特にこの、パーンダヴァの潜伏と正体を明かすことの理由が曖昧であるのは偶然ではなく、作者が意図的に行ったことである¹³⁾。第1幕でドローナやシャクニらが約束をする場面では、もし行方不明のパーンダヴァが発見された場合のペナルティが既に決まっていたとすれば、それを取り消すための手続きが必要であるし、第2幕で身分を明かす場面も、なぜ今まで名を隠していたのか、そしてなぜ今それを明かすのか説明されないのはやはり不自然である。

曖昧にした意図を忖度するのは困難ではない。この戯曲の眼目は、パーンダヴァが発見されることの意味を逆転した点にあった。発見されてはならないパーンダヴァが、逆に発見されねばならない者たちとなるわけである。ところで、発見されるためには行方不明でなければならない。行方不明であるには何らかの理由が要る。ところが、パーンダヴァが賭博に負けたせいで、期限付きで行方を隠さねばならなくなったという条件を劇にそのまま使うことは難しい。なぜなら、仮にそのような条件の下で、劇中にあるような約束が新たに結ばれるとすれば、古い条件を一旦ご破算にしなければならない。それも、全く裏返しにするわけであるから、かなり面倒で、特に叙事詩の物語をよく知っている観客には抵抗のある場面が必要と

なる。つまり、劇作家にとって必要なのは行方不明という状況だけで、その理由である賭博や発見されたときのペナルティはかえって邪魔だったのである。もちろん行方不明の別の理由を考え出すというようなことになれば、Mの枠組みそのものが崩壊してしまうであろうからこれも無理である。

そこで劇作家のとった方法は、行方不明という状況だけは残しつつ、その状況に至った経緯や彼らの課せられている条件などは、あたかも自明のことであるかのごとく、一切言及しないというものであった。本気でつじつまを合わせようとすれば、相当大掛かりな変更をせねばならなくなるが、こうして潜伏の理由に言及せず曖昧にしておけば、パーンダヴァの行方不明という状況を保存したまま、潜伏の意味だけを変えることができる¹³⁾。

4 想定されていた観客像

この劇は、人物関係や劇以前の事件の説明をほとんど欠いており、その部分を観客の予備知識に依存している。この前提は作者に、自分の都合の悪い要素、つまりパーンダヴァの潜伏の理由や、正体を自ら明かした理由を背景に押しやって曖昧化する機会を与えている。観客は、物語の重要な出来事が言及されていない場合、それを自分の知識から補って見ることに慣れているため、さほど不自然には感じなかったであろう。また、観客がMを知っていることを前提とした劇であるにもかかわらず、実際の内容はMをラジカルに逆転したものであることは奇妙に思えるかもしれない。しかし、この劇が対象としていたのは、舞台上で起こることが自分の知っている物語と異なっていることに気付いてもそれを受け入れる観客、つまり物語それ自体ではなく、よく知っている物語がどのように脚色されているかを楽しむ、言わば通の客だったのではないだろうか。脚色を理解するためにもやはり原作を知っていなければならぬのである。

Ⅶ 結 語

以上、PとMの比較によってPの制作意図を考察した。結論は次の通りである。作者は対立する両派の立場を逆転することで、Mでは他の部分と齟齬を生じていた二つの挿話を、物語を進める有効な要素として生かすことに成功した。しかしその改変によって生じる整合性の破綻は、都合の悪い部分を戯曲外に追いやることでは処理した。

注

- 1) 「バーサ劇」の問題は今世紀前半の欧米サンスクリット学界において最も盛んに議論された問題の一つである。詳しくは各文学史及びPusalker 1968を参照せよ。なお「バーサ劇」の通称は、発見者が前古典期の詩人バーサに帰したことによる。
- 2) 一般にインドの古い文献の年代や作者は不確実であることが多いが、「バーサ劇」の場合極端で、年代だけでも紀元前6世紀から紀元後11世紀までの前後17世紀にわたる諸説がある。

- 3) ダクシナーとはブラーフマナ(婆羅門)に支払う祭儀の謝礼である。ドローナは武術の達人で、カウラヴァとバーンダヴァ両方の師であるが、出身はブラーフマナである。
- 4) 劇の題名はこの「五夜」(pañcarātra)という言葉から取られている。この題からすぐ連想されるのは、ヴィシュヌ教のパンチャラートラ派だが、関係はよくわからない。ただ、劇の物語上で期限が6日や7日でなく5日である必然性は全くないから、何らかのつながりがあったと考えるのが自然ではある。
- 5) Pにおいて、バーンダヴァに真に敵対しているのはシャクニ一人である。第1幕ではシャクニとはほぼ同じ考え方のドゥリヨーダナも第3幕ではバーンダヴァに同情的な発言をするようになる。カルナは中立的な見解を持っており、ドゥリヨーダナに判断を一任している。「バーサ劇」で常に完璧な戦士として描かれるバーンダヴァたちに対し、カウラヴァのドゥリヨーダナ、カルナ、シャクニらの性格描写が、劇によって異なることは興味深い。
- 6) これについては、増田 1994を参照されたい。この挿話は、この巻の大体の構成が出来上がった後に、誰か別の詩人によって挿入されたものと思われる。その目的は *sūtaṣaṣatam* という地口を言うためであった。そして、その詩人はこの巻でバーンダヴァが素性を現さないように苦心しているという事実には無頓着であった。
- 7) ただしこの時ドゥリヨーダナが

「13年に足りないか過ぎたかは(?) ビーシュマが知っているだろう。」
 と言っていることは一応注意しておくべきであろう。13年の追放期間はまだ終わっていないことを前提に物語が進んでいるにもかかわらず、ここで彼は、実はもうそれが過ぎているかもしれない可能性を示唆している。これは、後に指摘する矛盾を、詩人がカウラヴァの勘違いということで解決しようとした名残かも知れない。
- 8) あるいは、キーチャカの親族をビーマが退治した第22章の挿話と同様、この部分も大筋が出来た後に別の詩人によって増補されたという考え方もできる。ただ、前後との齟齬がかなりはっきりしていた第22章とはやや事情が異なる。こちらの場合は果たして後の増補なのかどうか、またそうだとするとその範囲はどこからどこまでかということは現時点では言いかねる。
- 9) Mでは侵略の第一波を迎え撃つために全ての戦士が出払った都を第二波が襲い、唯一残っていたウッタラ王子がブリハンナラーを御者として出陣するという構成になっている。これにより、アルジュナを一人で活躍させることができる [Bhattacharyya 1991 : 43f.]。そして、屈強なアルジュナが女装して踊りの教師をするというこっけいな設定も、一人だけ宮廷に残るには必要な設定だったことがわかる。しかし劇では全員同時に出陣しており、この設定が生きていない。
- 10) この第3幕で、カウラヴァの宮廷にバーンダヴァたちはついに姿を現さない。それだけでなく、第2幕と他の2幕は登場人物がほとんど重複しない。これは、一人二役を前提に、俳優の数を少なく抑えるためと思われる。ここでバーンダヴァが登場した方が劇としては効果が高いが、登場させなければ、全3幕の登場人物の数がほぼ同じになり、端役を除けば数人の俳優で済む。カウラヴァとバーンダヴァが同時に現れる場面を作るとそれは不可能である。
- 11) これは単にバーンダヴァを見付けるのが困難であることを強調しているのであろう。

- 12) 既に Bhattacharyya 1991 : 46 も指摘している。
- 13) この事情とその方法は「バーサ劇」の最も有名な作品『スヴァプナヴァーサヴァダッタ』の場合と酷似している。これについては、増田 1990b を参照。

参考文献

- M : Bhandarkar Oriental Research Inst. (ed) *Mahābhārata* (cr ed). 19 vols. Poona, 1933-66.
- P : Devadhar, C.R. (ed) *Pañcarātram. Plays ascribed to Bhāsa*. Poona. 1962. (Delhi, 1987 rep ed), 373-419. ;
Woolner, A.C. & L. Sarup (tr) *Thirteen Plays of Bhāsa*. London 1930-31. (Delhi, 1985 rep ed)
- Bhattacharyya, B. (1991) *Bhāsa's Mahābhārata Dramas*. Calcutta.
- Ganapati = Sastri, T. (1985) *Bhāsa's Plays*. Delhi.
- Pusalker, A.D. (1968) *Bhāsa-A Study* (2nd ed). Delhi.
- Unni, N.P. (1978) *New Problems in Bhāsa Plays*. Trivandrum.
- Venkatachalam, V. (1986) *Bhāsa*. Delhi.
- 増田良介 (1990a) Svapnavāsavadatta の解釈 『東海仏教』35, 75-86.
- 増田良介 (1990b) Svapnavāsavadatta のプロット分析 『西南アジア研究』33, 69-85.
- 増田良介 (1993) 戯曲『カルナバーラ』のプロット分析 『インド学報』5, 1-14.
- 増田良介 (1994) 『マハーバーラタ』第4巻第22章について 『東海仏教』39, 66-56

(日本学術振興会・京都大学文学部)